



# 日本舞踊家のジェンダー表現 : ジェンダーフリーなダンス教育プログラムを考える

猪崎, 弥生  
水村 (九埜) 真由美  
米谷, 淳

---

**(Citation)**

表現文化研究, 9(2):119-128

**(Issue Date)**

2010-03-24

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81002906>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002906>



## 日本舞踊家のジェンダー表現 — ジェンダーフリーなダンス教育プログラムを考える

On Gender in Traditional Japanese Dance by Professional Dancers: An Approach to Secondary Education Program, “Gender-free Dance”

猪崎弥生 Yayoi Izaki 水村（久埜）真由美 Mayumi Kuno-Mizumura  
米谷淳 Kiyoshi Maiya

### 概要

執筆者らは日本舞踊における身体表現を、舞踊運動評価尺度(猪崎、2004, 2006)を用いた印象評価実験をもとに検討する作業を通して、日本舞踊が男女共修授業「ジェンダーフリーなダンス」の教材として適していると考えられている。

本研究は踊り手の身体性と踊りのジェンダー表現が舞踊印象に及ぼす影響を実験的に検討する。すなわち、男・女の日本舞踊における熟練舞踊家の男踊り・女踊りを呈示刺激として印象評価実験を行い、踊り手の違いと踊りの違いがどのように舞踊印象を規定するかを考察する。呈示刺激の作成にあたっては男性・女性1人ずつの日本舞踊熟練者に手だけの男踊り・女踊りにより喜怒哀楽の表現を求め、それをビデオに撮影して編集した。作成した刺激は踊り手2人(男・女)、踊り2種類(男踊り・女踊り)、感情4種類の計16種類である。その撮影した映像を16人の女子学生に舞踊運動評価尺度(猪崎、2004, 2006)で評価することを求めた。その結果として、男踊りは女踊りよりもなめらかで、低く、バランスがとれている印象を与えていた。

討議の中で、こうしたクロスジェンダー・マッチングを通して、執筆者らは日本舞踊における伝統の持つ優れた質の高さと女形としての伝統の技を実感することができた。さらに、執筆者らは実験の結果を経て「ジェンダーフリーなダンス」の教育プログラムを目指したパイロットとしての実践を通して授業モデルの構築に向けて検討を行っている。

キーワード: 日本舞踊、ジェンダー表現、女形、舞踊教育、印象評価実験

### Abstract

The present study aimed at investigating gender expressions of traditional Japanese dance from the approach of aesthetic impression (Izaki 2004, 2006), because traditional Japanese dance is appropriate as material in dance lessons concerning gender expression.

An impression estimation experiment was conducted by the cross-gender matching method, comparing dancers (a male and a female dancer), gender expression (male and female dance), and emotional expressions (joy, anger, sadness, happiness), examining interactive effects of these factors. Two professional dancers of traditional Japanese dance were video-taped while performing expressions the four emotions using their hands in two modes, male and female dance, to make sample motion pictures to be presented in the experiment. Sixteen female students rated each dance movement using a dance movement evaluation scale (Izaki 2004, 2006). It was found from the results that the male dance was rated smoother, lower, and well-balanced. Interestingly, the female dance of the male dancer was rated more feminine than that of the female dancer.

In the discussion, we focus on the high quality of traditional Japanese dance and the skill of the “OYAMA” in making the cross-gender matching successful. After the experiment, a pilot study was conducted of the dance education program “Gender-free dance”. This cross-gender matching dance lesson succeeded, and the prototype of dance education program “Gender-free dance” was established on the basis of the experimental study and this practical experience.

**Keywords:** *Traditional Japanese Dance, Gender Expression, OYAMA, Dance Education, Impression Estimation Experiment*

## 1. 序

欧米のダンス研究において「ダンスとジェンダー」研究が主流化したのは、1980年代半ばを過ぎてからであり、哲学や精神分析学からのアプローチが主なものであった(酒向、2003, 2005)<sup>17, 18</sup>。それらの多くは西洋舞踊史の中でダンスにおけるジェンダーを扱った研究、すなわちジェンダーの視点からの舞踊史の読み直しや劇場ダンスと女性の問題などに関するものであり、個々の舞踊様式における男らしさや女らしさに関するジェンダー表現を扱ったものは見当たらない。日本舞踊研究においてもそうした研究はこれまでほとんどなされていない。

1990年代に阿波踊りの男踊りと女踊りにおける動きの特性を検討した研究(中村、1994, 1995a, 1995b)<sup>13-15</sup>がなされているが、日本舞踊におけるジェンダー表現の本格的な研究がなされるようになったのは2000年以降であると言える。丸茂ら(2004)<sup>10</sup>は動作分析の手法をもとに日本舞踊の基礎動作「オクリ」に現れる女らしさの特徴を解析した研究を行っている。

このように、舞踊研究としてのジェンダー表現に関する研究はこれまであまりなされていなかったが、最近それへの社会的要請が高まっている。そのひとつが教育現場からの要請である。平成21年度より中学校の体育(1, 2年)でダンスが男女共修授業の試行期間となり、平成24年度から完全実施となる。これまでもダンスの男女共修授業は、多くの授業実践を通して検討されてきた<sup>11, 12</sup>が、この改訂に対応すべく、従来のダンス授業の内容・方法だけでなく指導者の養成・教育についても新たな指針を策定して研修・啓蒙を行い、効果的で適切な教育を実現することが喫緊の課題となっている。

こうした今、男らしさや女らしさとは何かを考えるジェンダー教育のプログラム策定の根拠となる実証的で体系的な舞踊研究が求められている。本研究は中学校体育で実施すべき教育プログラム「ジェンダーフリーなダンス」を目指して、舞踊におけるジェンダー表現に身体表現論的検討を加えようとするものである。ここで言う身体表現論は、猪崎(2006)<sup>3</sup>のようにドゥブラー(1968)<sup>1</sup>が提唱する「目に見えない、内的な舞踊(the unseen, inner dance)」と「外的な、観察される舞踊(the outer, observed dance)」の統合としての舞踊の身体のあり方を「身体性」と捉え、これを研究・教育しようとする立場である。

執筆者らは舞踊における身体表現を、舞踊運動評

価尺度(猪崎、2004, 2006)<sup>2, 3</sup>を用いた印象評価実験をもとに検討する作業を進めてきた(猪崎・水村、2007, 2008a, 2008b, 2009a, 2009b, 2009c)<sup>4-9</sup>。日本舞踊家の手の動きと足の運びを呈示して印象評価実験を行ったところ、女形の身体表現が女性舞踊家より女性的な印象を与え得ることが示唆された(猪崎・水村、2009a)<sup>7</sup>。

こうした作業を通して、執筆者らは日本舞踊が男女共修授業「ジェンダーフリーなダンス」の教材として適していると考えようになっている。日本舞踊は、女形の舞いの独自性だけでなく、美しさや芸術性の高さが広く知られている。これを中学生が学ぶことは、日本人女性、とくに立ち居振る舞いの美しさを舞台芸術に昇華させ、庶民にも親しまれてきた日本独自の伝統芸能のよさを味わい、次世代につなげていく機会となるのみならず、女性と異なる身体が女性美を表現するために創り出され磨き上げられた技を知り、身体動作の技術、あるいは「身体表現の作法」とでも言えるものを習得する機会となるだろう。これは、中学生に伝統的な女性美の表現方法を学ばせる以上の意味を持つ。「見る」「創る」「踊る(見せる)」活動を通して、男女が自己の身体性と表現性を捉え直し、それまでのジェンダーへのステレオタイプ的な見方やジェンダー・バイアスを認識して相対化し、学習した「身体表現の作法」をもとに、そうしたものととらわれない身体表現を各自が創り出していけるようになる。こうした経験を獲得する場としては、身体としてのジェンダーと身体表現としてのジェンダーとを対置させる状況、すなわち、踊り手の生物学的な「性」と舞踊表現における「身体性」としての男性性(男らしさ)・女性性(女らしさ)を組み合わせた「クロスジェンダー・マッチング」のダンスが適しており、その代表例が日本舞踊であると考えられる。

本研究では、猪崎・水村(2009b)<sup>8</sup>と同様の手続きにより、日本舞踊におけるジェンダー表現を検討する。具体的には、踊り手の性と舞踊表現における男性性・女性性を組み合わせた「クロスジェンダー・マッチング」法により作成した映像刺激を呈示して印象評価実験を行い、結果を分析して踊り手の身体性と踊りのジェンダー表現が鑑賞者の印象をどのように規定するかを考察する。これをもとに、中学校体育教育プログラム「ジェンダーフリーなダンス」の授業モデルについて論じることとする。

## 2. 実験

### 2.1. 目的

踊り手の「身体性」と踊りのジェンダー表現が舞踊印象に及ぼす影響を実験的に検討する。すなわち、男・女の熟練舞踊家の男踊り・女踊りを呈示刺激として印象評価実験を行い、踊り手の違いと踊りの違いがどのように舞踊印象を規定するかを考察する。

### 2.2. 方法

#### 1) 評定者

A大学舞踊専攻学生女子16人

#### 2) 呈示刺激

呈示刺激の作成にあたっては男性・女性の日本舞踊熟練者各1人に手だけの男踊り・女踊りにより喜怒哀楽の表現を求め、それをビデオに撮影して編集した。作成した刺激は踊り手2人(男・女)、踊り2種類(男踊り・女踊り)、感情4種類の計16種類である。【図1~4】に喜びの表現(男性男踊り、男性女踊り、女性男踊り、女性女踊り)を示す。図示した横に並ぶ3枚の静止画は、3秒間で行われた喜びの表現をキャプチャーしたものである。手による喜怒哀楽の感情表現は、左手を高く上げた状態から肩のラインまで下ろすまでの3秒間で行うことを求めた。一方の手による感情表現は、SAWADA, et.al (2003)<sup>19</sup>に基づいて行い、左手試行としたのは、カメラの設置による実験環境の制約からである。

#### 3) 評定尺度

舞踊運動評価尺度(猪崎, 2004, 2006)<sup>2, 3</sup>の中から17項目を選び、各々5段階で評定した【表1】。17項目としたのは、一方の手による感情表現ということから、舞踊運動評価尺度19項目の中から「対称な-非対称な」を削除し、さらに力性の項目の多さから先行研究(猪崎, 2004)<sup>2</sup>に戻り検討した結果、「一気に-一定の」も削除した。

#### 4) 手続き

20人教室に16人の評定者を集め、37V型ディスプレイに編集した4つの感情表現のそれぞれについて男性男踊り、男性女踊り、女性男踊り、女性女踊りの順に呈示し、呈示終了後のインターバル(2分)の間に評定用紙に記入してもらった。実験は約1時間であった。

### 2.3. 結果と考察

17評定項目についてSPSS ver.12を用いて主成分分析をした結果、【表2】に示すように4つの因子が抽出された。各因子の因子負荷量の高い項目を調べたところ、

表1 評定項目

強い	弱い
高い	低い
ダイナミック (動的)	スタティック (静的)
とがった	まるい
急変的	持続的
不規則な	規則正しい
緊張	弛緩
スピードのある (速い)	ゆっくりとした (遅い)
アクセントのある	なめらかな
重い	軽い
リズムカルな	単調な
加速的	減速的
大きい	小さい
直線的	曲線的
バランスのとれた	アンバランスな
メリハリのある	平坦な
断続的	連続的

表2 17評定項目における因子負荷量

	1	2	3	4	共通性
速い	0.879	0.166	-0.046	0.035	0.787
アクセント	0.862	-0.180	0.076	0.241	0.506
メリハリのある	0.843	0.015	-0.062	0.070	0.793
急変的	0.837	-0.213	-0.220	0.070	0.740
動的	0.812	0.284	-0.034	-0.227	0.799
強い	0.807	0.120	0.225	-0.265	0.802
リズムカル	0.778	0.144	-0.282	0.009	0.766
とがった	0.768	-0.072	0.233	0.300	0.803
緊張	0.758	-0.117	0.416	-0.066	0.839
断続的	0.747	-0.280	-0.037	-0.049	0.846
規則正しい	-0.701	0.404	0.346	0.166	0.706
加速的	0.688	0.155	-0.056	0.110	0.513
直線的	0.632	-0.036	0.394	0.492	0.722
高い	0.502	0.462	-0.126	-0.156	0.797
大きい	0.502	0.484	0.202	-0.441	0.705
バランスのとれた	-0.388	0.575	0.383	0.280	0.720
重い	-0.073	-0.496	0.651	-0.414	0.640
分散の%	50.537	9.007	7.788	6.099	



図1 男性男踊り喜び(左から3秒間の経過の中で抽出した静止画)



図2 男性女踊り喜び(左から3秒間の経過の中で抽出した静止画)

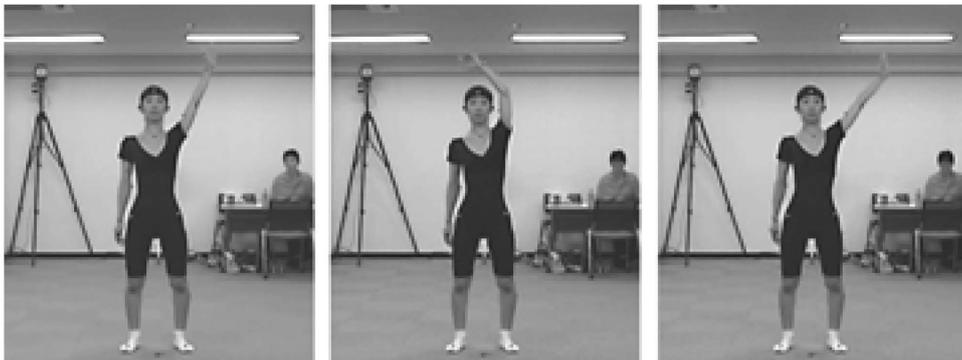


図3 女性男踊り喜び(左から3秒間の経過の中で抽出した静止画)

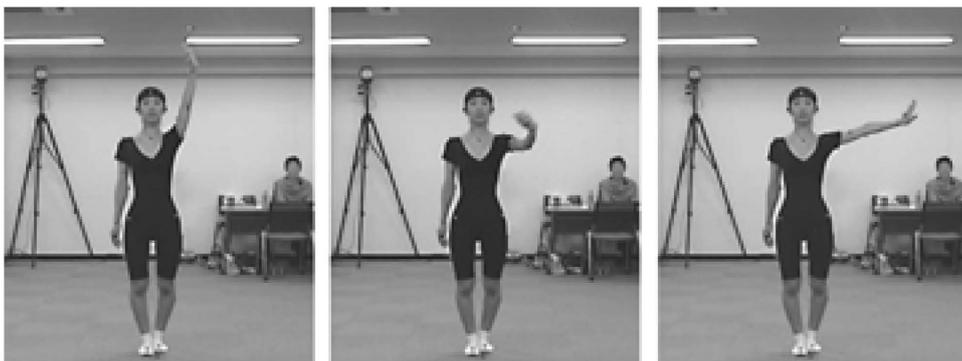


図4 女性女踊り喜び(左から3秒間の経過の中で抽出した静止画)

先行研究(猪崎・水村, 2009b)<sup>8</sup> とほぼ同じ因子構造であり、そこで扱った項目をそれぞれの因子の代表として用いてもよいことが確認された。因子の代表として、第1因子は「アクセントのある—なめらかな」、第2因子は「バランスのとれた—アンバランスな」、第3因子は「重い—軽い」を取り上げ、そして、もうひとつ、先行研究(猪崎・水村, 2009b)と比較するため、その研究で代表とした「高い—低い」も参考として加えた。それらの評定項目の項目得点について、踊り手の性、踊りのジェンダー表現、感情表現を固定因子、評定者を変量因子として1変量の一般線型モデル(3元配置分散分析に相当)を用いて統計分析をした。その結果を【表3】にまとめる。【表3】は踊り手の性(「踊り手」)、踊りのジェンダー表現(「踊り(ジェンダー表現)」)、感情表現(「感情」)の主効果、及び、それらの交互作用の中で変動が有意であったものを○で示している。

①踊り手の性の主効果

アクセントと高低について、踊り手の性による有意差がみられた【図5】。男性の踊り手は女性の踊り手よりもアクセントがあり高い印象を与えたことがわかった。

表3 分散分析の結果

	アクセント	高低	バランス	重軽
1 踊り手	○	○	×	×
2 踊り(ジェンダー表現)	○	○	○	×
3 感情	○	○	○	○
4 踊り手×踊り	○	×	×	○
5 踊り手×感情	○	×	○	○
6 踊り×感情	○	○	×	×

○は変動が5%水準で有意、×は変動が有意でない。

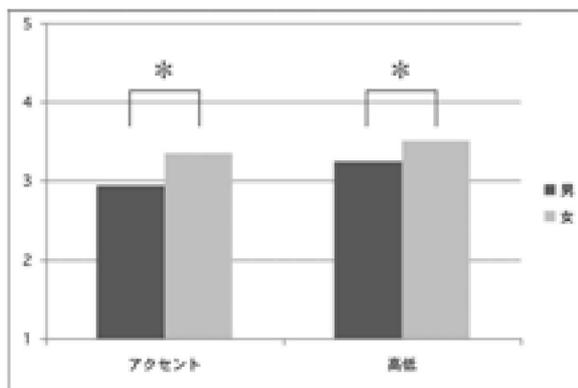


図5 踊り手の性の主効果 \* :p<0.05

②踊りのジェンダー表現の主効果

アクセント、高低、バランスについて、踊りのジェンダー表現、すなわち男踊りと女踊りの間に有意差が見られた【図6】。すなわち、男踊りは女踊りよりもなめらかで、低く、バランスがとれている印象を与えていた。

③感情表現による主効果

アクセント、高低、バランス、重軽について4つの感情表現による変動が有意であった。しかし、順序は異なっていた【図7】。アクセントは楽>怒>喜>哀の順になめらかで、高低は楽=喜>怒>哀の順に低く、バランスは哀>怒=喜>楽の順にアンバランスで、重軽は怒>哀>喜=楽の順に軽い印象を持たれていた。

④踊り手と踊りのジェンダー表現の交互作用

アクセントと重軽について、踊り手と踊りのジェンダー表現の交互作用が有意であった。【図8】に示すように、アクセントについては、男性・女性とも男踊りが女踊りよりもなめらかであると評価されたが、男性の踊り手の方が女性の踊り手よりも男踊りと女踊りの違いが大きかった。【図9】に示すように、重軽については、男性の踊り手は男踊りが女踊りよりも軽い印象を与えているのに対して、

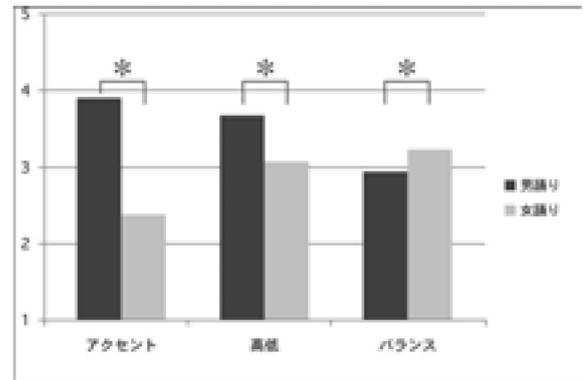


図6 踊りのジェンダー表現の主効果 \* :p<0.05

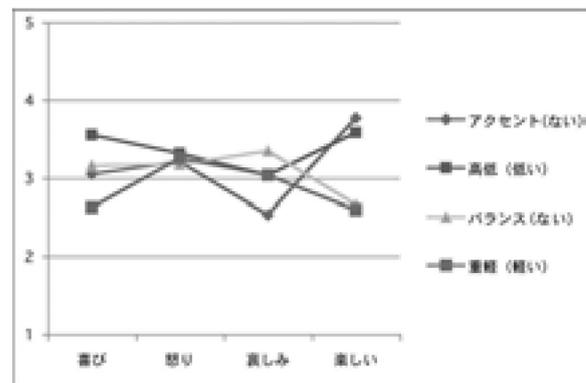


図7 感情表現による主効果

女性の踊り手は逆であった。

⑤踊り手と感情表現の交互作用

アクセント、バランス、重軽について、踊り手と感情表現の交互作用が有意であった。【図10】に示すように、アクセントでは怒りの感情表現で踊り手の間に有意差があり、【図11】に示すように、重軽では哀しみの感情表現に違いが見られた。【図12】に示すように、バランスは怒りと哀しみの感情表現に踊り手による違いが見られた。

⑥踊りのジェンダー表現と感情表現の交互作用

アクセントと高低について、踊りのジェンダー表現と感情表現の交互作用が有意であった。【図13】に示すように、アクセントは喜びの感情表現に男踊りと女踊りの違いが見られた。高低は怒りの感情表現に男踊りと女踊りの違いが見られた【図14】。

3. 討議

今回実施した実験は、評定者16人であり、妥当性を持

つ統計分析に十分なサンプル数とは言えない。従って、ここで得られた知見は仮説としてさらなる検証が必要である。しかしながら、この実験で示唆している事項は、舞踊研究・舞踊教育に有用なヒントを与える。以下に、この実験が示唆した事項をもとに、日本舞踊とジェンダー、ダンス教育プログラムについて論じることとする。

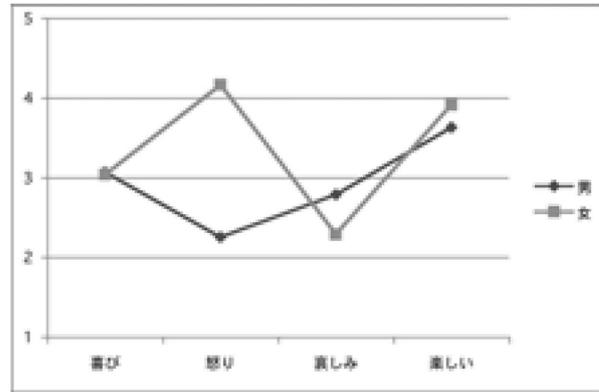


図10 アクセントにおける踊り手と感情表現の交互作用 (1 アクセントのある ⇔ なめらかな 5)

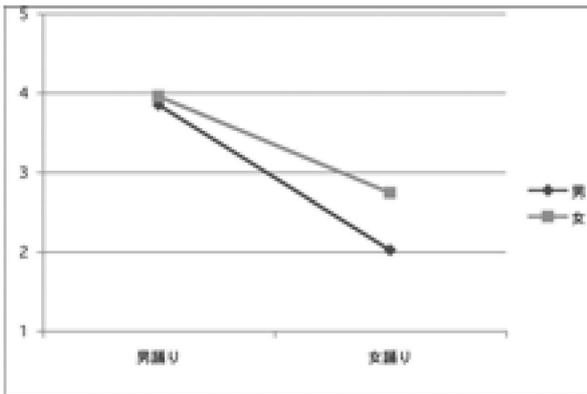


図8アクセントにおける踊り手と踊りの交互作用 (1 アクセントのある ⇔ なめらかな 5)

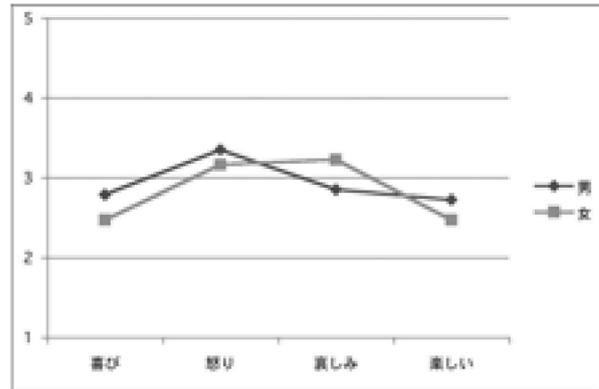


図11 重軽における踊り手と感情表現の交互作用 (1 重い ⇔ 軽い 5)

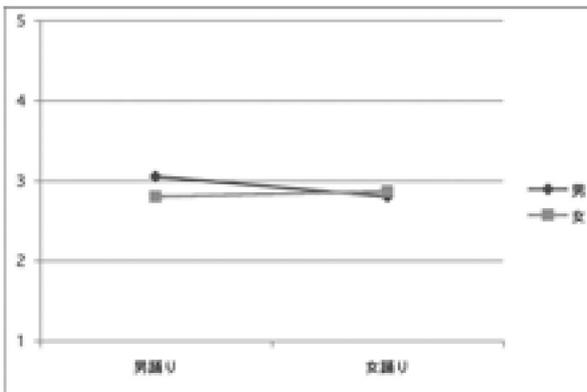


図9 重軽における踊り手の性と踊りの交互作用 (1 重い ⇔ 軽い 5)

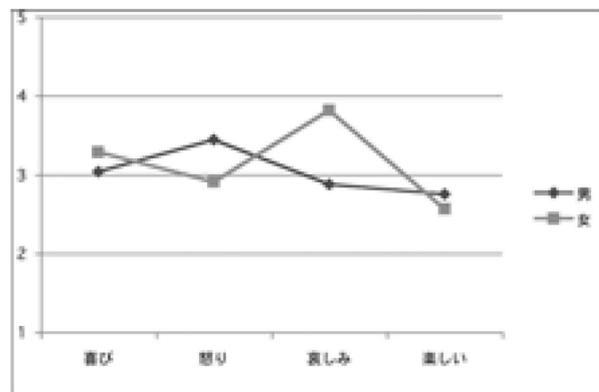


図12 バランスにおける踊り手と感情表現の交互作用 (1 バランスのとれた ⇔ アンバランスな 5)

### 3.1. 日本舞踊とジェンダー

印象評価実験の結果、日本舞踊家が男踊り・女踊りにより演じた感情表現が、喜怒哀楽という4つの感情表現の異なりを伝えるだけでなく、踊りと踊り手のジェンダーを伝え得ることが確認された。

踊り手による印象の違いが見られたが、男性と女性の踊り手の違いだけではなく、踊り手と踊り(男踊り・女踊り)の交互作用が有意であった。男踊りと女踊りの印象の違いは、女性の踊り手より男性の踊り手の方がより大きかった。これについては、二通りの説明が可能である。ひとつには、その結果を男性の踊り手の方が女性の踊り手よりも男踊りと女踊りをよりダイナミックに踊り分けていたとする説明である。他方は、その結果を踊り手の身体性に帰属するものであるという説明である。すなわち、男性の踊り手の身体性が女性の踊り手の身体性より、踊りのジェンダー表現にとってより効果的であるとする説明である。どちらにしても、男踊りと女踊りをどのように見せるかという見せ方の問題であると考え。男性の踊り手と女性の踊り手による違いが見られたのは、

女踊りだけであった。女踊りはこの実験の対象となった男性の踊り手にとって特別なものであったのかもしれない。何故なら、男性の踊り手は、女形として日本舞踊を踊っていた舞踊熟練者であったからである。

舞踊におけるジェンダー表現をそれぞれの舞踊様式の型や舞踊家の技を抜きにしては考えることができない。ジェンダー表現もそれぞれの舞踊様式が持つ独自の表現性として捉えるべきであろう。それ故に、女形の踊る女踊りが女性舞踊家の女踊りより女性的な表現を持つのは、伝統的な日本舞踊の独自性かもしれない。歌舞伎舞踊はさまざまな女踊りが女形によって踊られてきた。そうした伝統の中で、女踊りが女形に適した踊りになっていった可能性もある。これに対して、女性が踊ることによって優れた男性性を醸し出す踊りもあるかもしれない。つまり、踊り手の身体性、踊りの表現性を切り離して論じることはできない。踊り手も日本舞踊熟練者による実験から示唆されたように、自らの身体性を熟練の技によって強調したり弱めたりできるようになると考える。身体性も表現性の中で磨かれ、整えられ、高められると考える。これが中学校体育の男女共修授業のダンスを導入する際の基本的な教育原理となる。

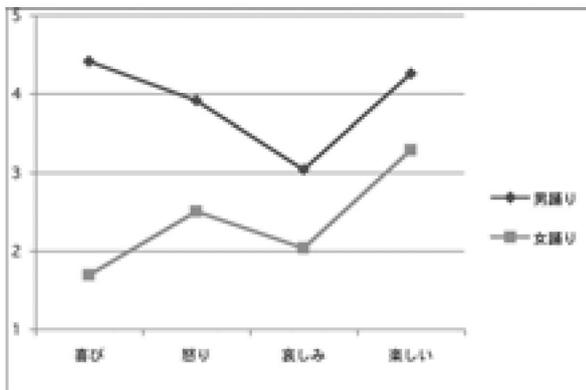


図13 アクセントにおける踊りと感情表現の交互作用 (1 アクセントのある ⇔ なめらかな 5)

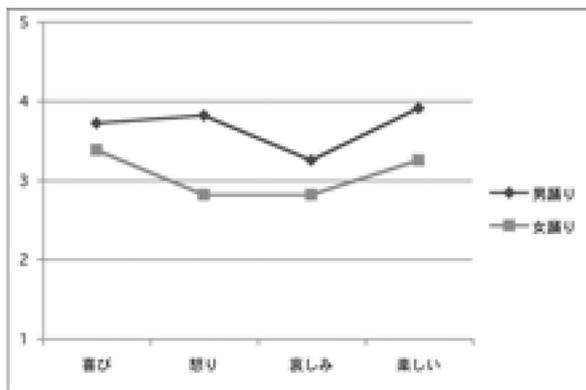


図14 高低における踊りと感情表現の交互作用 (1 高い ⇔ 低い 5)

### 3.2. ジェンダーフリーなダンス教育プログラムを考える

最後に中学校体育におけるダンスにおいてどのような指導をすべきであるかを考えてみる。執筆者らは、「ジェンダーフリーなダンス」の教育プログラムを目指したパイロットとして、ひとつの実践を行った。その実践とは、独立行政法人日本学術振興会の受託研究である平成21年度ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室～KAKENHI(研究成果の社会還元・普及事業)における「からだで感じる男と女～日本舞踊を踊ってみよう～」である。以下にその内容を報告する。

#### <実践の概要>

実施者:猪崎弥生 水村真由美

対象者:中学生女子8人、中学生男子1人、小学5年生女子1人、高校生女子1人

ゲスト講師:花柳琢次郎 勝美巴湖

場所:お茶の水女子大学 徽音堂

日時:平成21年8月31日(月)13時～17時

本実践は、日本舞踊における男らしさと女らしさを目で見て感じ、研究成果の解説を聞いて学び、さらに実際に日本舞踊の男らしさや女らしさの動きの特性を体

験するという活動すべてを盛り込んだものであった。受講生が身体を通して日本舞踊における男の表現、女の表現を体験学習することのおもしろさを実感してもらうため、熟練した男性と女性日本舞踊家に実演してもらい、そして一緒に実習を行った。またビデオ映像を用いた印象評価実験を行い、さらに研究における動作分析で得られたスティックピクチャーの画像を見ることを通して日本舞踊における男らしさと女らしさという動きの特性を示すことも行った。

#### <実演プログラム>

- ・テーマ: 日本舞踊における「男らしさ」と「女らしさ」とは一体何でしょうか?
- ・実演Ⅰ ①「雨の五郎」(前半) 男性舞踊家が男踊りを踊る ②「藤娘」(前半) 女性舞踊家が女踊りを踊る
- ・実演の解説 ①日本舞踊の男らしさの表現上の特徴と考察 ②日本舞踊の女らしさの表現上の特徴と考察
- ・実演Ⅱ 男女の役を交代して実演 ①「雨の五郎」(前半) 女性舞踊家が男踊りを踊る ②「藤娘」(前半) 男性舞踊家が女踊りを踊る
- ・実演Ⅲ 性別および年齢を次々と変えていく日本舞踊の作品の実演

#### <印象評価実験の体験プログラム>

男女の日本舞踊家による手の上げ下げと足の運びの映像を鑑賞し、その印象を評価する実験に参加する

#### <研究解説>

女らしい動きと男らしい動きを科学する

#### <体験プログラム>

正座とお辞儀、立つ、座る、基本的な重心移動の稽古、膝の使い方の基本、腰のひねり、身体全体のひねりによる男女の役の使い分け、舞踊実習「さくらさくら」、男女の役を両方踊る稽古、仕上げに全員で踊る【図15、16】

執筆者らが検討している「ジェンダーフリーなダンス」の授業プログラムは、現段階では次のようにモデル化できる。ここで報告した研究や他の研究の成果を踏まえながら、今後、実験授業を行い専門家や現場の体育教師から意見を聞いて改良する作業を進め、中学生男女が互いに学びあいながら、ジェンダーを知りジェンダーから解放されるダンスの授業を作り上げたいと考えている。

#### <授業モデル>

- 1) オリエンテーションと事前セッションとグループ作り
- 2) ジェンダーを知り、ジェンダーから解放される  
日本舞踊における男踊りと女踊りを体験して、その違いと共通する動きの特性を理解する。日本舞踊における踊りの型を学ぶ。
- 3) 身体を知り、身体から解放される  
喜怒哀楽を身体運動で表現することを通して、感情、身体、動きの関係を理解する。生徒同士で身体表現を見せ合うことによって、身体表現の共通性や独自性を学ぶ。
- 4) 創作活動のためのグループワークのオリエンテーション
- 5) グループ創作
- 6) 総括セッションと発表会

以上のように、執筆者らは日本舞踊における身体表現を、舞踊運動評価尺度(猪崎、2004、2006)<sup>2,3</sup>を用いた印象評価実験をもとに検討する作業を通して、日本舞踊が男女共修授業「ジェンダーフリーなダンス」の教材として適していると考えられるようになってきている。日本舞踊は女形の舞いの独自性だけでなく、美しさや芸術性の高さが広く知られている。これを中学生が学ぶことは、伝統的な女性美の表現方法を学ばせる以上の意味を持つ。こうした経験を獲得するために、身体としてのジェンダーと身体表現としてのジェンダーとを対置させる状況を作り、その中で中学生の男女がジェンダーから捉える身体表現を学ぶ場を作り出していかなければならない。



図15 膝の使い方を学ぶ



図16 全員で一緒に踊る

## 図版出典

- 図 1-4 写真は実験呈示刺激の映像より執筆者が静止画としてキャプチャーしたものである。  
図 5-14 執筆者が作成したものである。  
図 15,16 写真は執筆者が撮影したものである。

## 注

- 1 H'Doubler, Margaret N., *DANCE A CREATIVE EXPERIENCE*, The University Wisconsin Press, 1968, p. 101.
- 2 猪崎弥生 「舞踊運動の表現性評価のための評定用語の設定とその妥当性の検討」『表現文化研究』第4巻第1号、神戸大学表現文化研究会、2004年、27-40頁。
- 3 猪崎弥生 「舞踊教育における『見る』に関する実証的研究」神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文、2006年。
- 4 猪崎弥生・水村(久埜)真由美 「バレエと日本舞踊における熟練者の身体表現——手の動きと足の運びを中心に——」日本体育学会第58回大会予稿集、2007年、165頁。
- 5 猪崎弥生・水村(久埜)真由美 「バレエと日本舞踊における熟練者の身体表現——手の動きと足の運びを中心に——」『表現文化研究』第7巻第2号、神戸大学表現文化研究会、2008年、99-106頁。
- 6 猪崎弥生・水村(久埜)真由美 「バレエと日本舞踊における手による感情表現——舞踊運動評価尺度を用いた認知実験——」日本体育学会第59回大会予稿集、2008年、102頁。
- 7 猪崎弥生・水村(久埜)真由美 「日本舞踊における女らしさ——手の動きと足の運びを中心に——」『表現文化研究』第8巻第2号、神戸大学表現文化研究会、2009年、77-83頁。
- 8 猪崎弥生・水村(久埜)真由美 「バレエと日本舞踊における手による感情表現——その2 舞踊学生による評価実験——」日本体育学会第60回記念大会予稿集、2009年、105頁。
- 9 猪崎弥生・水村(久埜)真由美 「日本舞踊における女らしさ——手の動きと足の運びを中心に——」『舞踊学』第32号、舞踊学会、2009年、97頁。
- 10 丸茂祐佳・吉村ミツ・小島一成・八村広三郎 「日本舞踊における基礎動作『オクリ』に現れる女らしさの特徴分析」『舞踊学』第27号、2004年、26-33頁。
- 11 宮本乙女 「ダンス学習とジェンダー 報告1——男女共修のダンス創作学習における、学習者の意識の変容——」『お茶の水女子大学附属中学校紀要』第31集、2001年、71-82頁。
- 12 宮本乙女 「ダンス学習とジェンダー 報告2——ダンス学習による学習者と指導者の意識の変容——」『お茶の水女子大学附属中学校紀要』第32集、2002年、103-118頁。
- 13 中村久子 「阿波踊りの動きと多様性とその要因——

- その1——」『舞踊学』第17号、舞踊学会、1994年、68-69頁。
- 14 中村久子 「阿波踊りの動きと多様性とその要因——その2——」『舞踊学』第18号、舞踊学会、1995年、56-57頁。
- 15 中村久子 「阿波踊りにみる男の動作・女の動作」『女子体育』第37巻第4号、日本女子体育連盟、1995年、48-51頁。
- 16 中村久子 「徳島県の伝統文化『阿波踊り』の教材化に向けた基礎的研究」『(社)日本女子体育連盟学術紀要』第25号、日本女子体育連盟、2008年、1-12頁。
- 17 酒向治子 「〈書評〉Sharon E. FRIEDLER and Susan B. GLAZER(eds.), *Dancing Female: Lives and Issues of Women in Contemporary Dance*」『ジェンダー研究』第6号(通巻23号)、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報、2003年、155-158頁。
- 18 酒向治子 「『ダンスとジェンダー』研究——A. デリー(Ann Daly)の〈male gaze〉をめぐる理論的変遷について——」『上演舞踊研究』6巻、2005年、25-28頁。
- 19 Sawada, Misako, et.al., *Expression of emotions in dance: relation between arm movement characteristics and emotion*, *Perceptual and Motor Skills* 97, 2003, pp. 697-708.

#### ■執筆者について

猪崎弥生(いざき・やよい)

お茶の水女子大学文教育学部教育学科表現体育学専攻卒業。お茶の水女子大学大学院人文科学研究科舞踊教育学専攻修了。平成18年、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程修了。博士(学術)。現在、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 舞踊・表現行動学コース教授。

E-mail: izaki.yayoi@ocha.ac.jp

水村(久埜)真由美(みずむら(くの)・まゆみ)

お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学専攻卒業。東京大学大学院教育学研究科体育学・スポーツ科学専攻修了。平成9年東京大学大学院教育学研究科身体教育学専攻修了。博士(教育学)。現在、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 舞踊・表現行動学コース准教授。

E-mail: mizumura.mayumi@ocha.ac.jp

米谷淳(まいや・きよし)

神戸大学大学教育推進機構教授。専門は実験心理学および対人行動論。実験心理学に関する最近の論文に、「構えと錯視」『錯視の科学ハンドブック』後藤倬男・田中平八(編)、東京大学出版会、339-348頁、2005年など。

E-mail: maiya@kobe-u.ac.jp

#### ■Notes on the Contributors

Yayoi Izaki had received M.A. degree from Ochanomizu University. She completed the doctoral program of Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University in 2006 (Ph.D. Kobe University). Currently, she is a professor of Department of Dance, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University.

Mayumi Kuno-Mizumura had received M.S. degree from University of Tokyo. She completed the doctoral program of Graduate school of Education, University of Tokyo in 1997 (Ph.D. University of Tokyo). Currently, she is an associate professor of Department of Dance, Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University.

Kiyoshi Maiya is Professor in Experimental Psychology and Theory of International Behavior at Kobe University, Japan. His articles on Experimental Psychology include, 'Set and visual illusion' in Goto, T. & Tanaka, H.(Eds.), *Handbook of Science of Visual Illusion*, Tokyo University Press, pp.339-348, 2005.